JIC インフォメーション

第229号 臨時号 2024 年 4 月 10 日
年 4 回 1･4･7･10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所:JIC国際親善交流センター　発行責任者:伏田昌義　https://www.jic-web.co.jp
東京オフィス:〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階　TEL:03-3355-7294　jictokyo@jic-web.co.jp
大阪･ロシア留学デスク:〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NS ビル 5 階 TEL:06-6944-2341

ロシア･旧ソ連 国際交流誌

写真は、本紙記事より抜粋

≪講演録≫ 「エンドゲーム？―逆説のウクライナ戦争」
‥‥‥‥‥‥下斗米 伸夫（法政大学名誉教授）‥‥‥2P
≪連載≫ こんな時代にロシア語のすすめ
「ペルシャ語を目指してロシア語？」‥‥‥‥黒田 龍之助‥‥11P
≪本の紹介≫「MOCT『ソ連』を伝えたモスクワ放送の日本人」‥‥12P
≪日ロ交流情報≫
JIC ロシア語講座交流会の報告‥‥‥‥‥‥小原 浩子‥‥14P
初めてのロシア　イワノフカ村訪問‥‥‥齊藤　寛‥‥15P
第 4 回ロシア文学読書感想文コンクール‥‥‥‥‥‥‥‥17P
日ロ異業種ビジネス交流会‥‥‥‥‥‥樫本 真奈美‥‥18P

JIC では、Ｊクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

3 月 9 日、大阪日ロ協会（藤本和貴夫理事長）の第 45 期定期総会が大阪市内の会場とオンライン併用で開催されました。

総会後の記念講演では、「エンドゲーム？～逆説のウクライナ戦争」と題して、下斗米伸夫・法政大学名誉教授が、ウクライナ戦争の背景からロシア、ウクライナ、アメリカなどの最近の動きを解説。3 年目に入りウクライナ戦争は膠着状態に陥っていますが、停戦和平にむけた新しい動きが始まっているようです。

以下、大阪日ロ協会の了解を得て、講演録を掲載します。（編集部）

大阪日ロ協会 定期総会・講演会（3 月 9 日）

講演録 『エンドゲーム？―逆説のウクライナ戦争』

下斗米 伸夫（法政大学名誉教授、神奈川大学教授）

本日は大阪日ロ協会の定期総会・講演会にお招きいただき、ありがとうございます。

このウクライナ戦争で日ロ関係は平和条約交渉が止まってしまっているわけですが、先日、武藤頭・駐ロシア新大使が着任後の記者会見で、この戦争の中でも戦争終結後を見据え、「中断している日ロの文化・人的交流事業を再開する」という新しいメッセージを発しました。

これに関連して少し個人的なことですが、この 3 月 6 日に亡くなられた政治学者の五百旗頭真・元防衛大学学長とともに進めた日ロ共同歴史研究について一言触れ、故人の日ロ関係における功績をお話ししておきたいと思います。五百旗頭氏は神戸大学教授だった 1995 年に阪神･淡路大震災で被災し、自宅も被害を受けゼミの教え子も失ったのですが、兵庫県の復興会議に参加され､その後 2011 年 3 月の東日本大震災では政府の東日本大震災復興構想会議の議長を務められました。ちょうどこの 3.11 の前に､日ロ関係もいろいろな意味で今後変わる必要があるのではないかという意図から、日本とロシアの外交関係についても、日ロ間の違いは違いとして対話を深めるために、パラレル・ヒストリーという企画を一緒に立ち上げました。ロシア側のパートナーはモスクワ国際関係大学のトルクノフ学長で、2014 年に淡路島で日ロの外交・国際関係専門家が参加し、お互いの歴史認識のどこに相違点があるのかという議論をし、その後日英ロ語で論文集を出版しました。このウクライナ戦争を経て、これから少しずつでも日ロ市民交流を再開しなければならない時に、大変重要な人物を亡くしたのは残念なことで、改めて哀悼の意を捧げたいと思います。

3 年目に入ったウクライナ戦争

この 2 月 24 日でウクライナ戦争は丸 2 年が過ぎ、3 年目に入りました。2 年前の大阪日ロ協会の決議にあるように、言うまでもなくロシアの軍事侵攻は、ほかならぬロシア自身が安全保障理事国を務める国連憲章に照らしても、これは明らかに違法な戦争行為であります。この戦争がもう 2 年間も続いているわけです。

現在のロシアとウクライナの関係、国家関係という意味では 1991 年 12 月のソ連崩壊以来 30 数年の歴史に過ぎませんが、しかし両者の関係自体は 1000 年以上にわたる長い複雑な歴史があります。

キエフ・ルーシ（キエフ大公国）のウラジーミル大公が、988 年にキリスト教（東方正教会）の受洗をした場所が、ほかならぬクリミア半島のケルソネソスという町（当時はギリシャの植民都市）です。この地でキリスト教を受け入れたのがロシアとウクライナの歴史的な始まりだということです。その意味では､ウクライナとロシアとは兄弟関係なのですが、この「兄弟喧嘩」のような紛争がどうして「兄弟殺し」ともいうべき悲惨な戦争になってしまったのか。

これはやはり、単にロシア・ウクライナという二国関係だけではなく、多極化という表現もありますが、同時にアメリカや NATO 諸国、また中国、インドなど新興諸国を含めた冷戦後の国際政治の大きな変容というものが深く結びついているのだというのが私の考えです。

ちなみに、この受洗の地に建てられた聖使徒ウラジーミル教会の隣が、ロシア黒海艦隊のセバストポリ基地なのです。

古代ギリシャ以来、あるいは東ローマ帝国の影響下で東方正教会と国家との関係は、西側の考えるキリスト教と国家との関係、つまり政教分離とは違って、軍事も含めて非常に密接に結びついた、双方がシンフォニーな関係だということです。つまり、正教会の世界では国家との関係が非常に重要であるということが、政教が分離したヨーロッパ人やアメリカ人キリスト教徒にも十分理解できていないところが、一つの大きな問題ではないかと思います。

米欧を含めた複合的戦争、「文明の衝突」

2022 年 2 月 24 日に開始されたロシアの特別軍事作戦（SMO）。その名の通りプーチン大統領は 3 日で終わると考えていた。キーウ（キエフ）でも、ハルキウ（ハリコフ）でも、「ロシア軍は花束でもって迎えられるだろう」と、ハルキウに至っては侵攻部隊の中に軍楽隊まで連れて行ったわけですね。それが 3 日で制圧するどころか、ウクライナ軍の激しい抵抗に遭って、2 年経っても終わらない泥沼の戦争になってしまった。

ロシア語で、Кто виноват, Что делать （＝誰が悪いのか？ 何をなすべきか？）」という言い方があります。ウクライナ戦争をめぐっては、以来世界的にも長い議論がされているわけです。

大きく分けて 2 つの考えがあると思います。一つは、「ロシア・ソ連帝国の膨張主義戦争」のあらわれという考え。これは米ハーバード大学ウクライナ研究所のセルフ・プロフィ教授のテーゼ、ウクライナ支持の立場や北米でもネオコン（新保守主義）派に近い認識です。これに対し、アメリカの中にも、それだけではとても説明できなくて、この戦争は「アメリカを含めた複合的戦争」、一種の「文明の衝突」なんだという議論があります。私は比較的こちらの考えに共感するのですが、文明の衝突というのは、この紛争にはいろんな次元の問題が複合的に絡みあっているということです。私は４つのレベルに区別して考える必要があるのではないかと思います。

４つの複合的要因

第一は、ウクライナ国内の東西対立、ディバイド（分裂）です。西ウクライナ（ガリツィア）は歴史的には帝政ロシアに入ったことがないハプスブルグ帝国の版図、カトリックの非常に強い世界であり、他方東部にはギリシャから伝わった東方正教会の世界が広がっています。これが今まさにウクライナ東部のドンバスをめぐって、「親ロ派民兵」と「ネオ・ナチ」という形でぶつかりあっているわけです。

第二は、ロシアとウクライナとの文字どおり国家間の戦争。プーチン氏がいくら「作戦」と言おうと、これが戦争であることは間違いありません。ヨーロッパで 1945 年以降初めての大規模な戦争です。つい先日、ゼレンスキー大統領はウクライナ兵士の死亡数は 3 万 7 千人と発表しましたが、おそらくこれは過小評価であって、ロシアとウクライナ両方合わせて数十万から百万にのぼる死傷者を出すとてつもない規模の戦争になっているわけです。

第三は、西側・NATO とロシアの「代理」戦争の側面です。アメリカと西欧諸国はロシアに対して厳しい制裁を科す一方、ウクライナに膨大な軍事・金融援助を行ってこれを支えています。米国は今共和党議会の突き上げで動きがとれませんが、かわって数日前にはフランスのマクロン大統領がウクライナに派兵する可能性があるとまで発言し、モスクワとパリとの間に大きな対立が起きております。

第四に、この問題を引き起こしたきっかけは実はアメリカの内政問題だった。私の見るところ、1996 年にクリントン政権が米大統領選挙対策として、1000 万と言われるポーランド移民票欲しさに NATO 東方拡大に踏み切った。このツケ回しがただでも国内の東西関係対立を抱えるウクライナの分裂を招いた。その意味ではアメリカの内政問題とウクライナ戦争とは切り離すことができないのではないかというのが、私の視点です。逆に言うと米大統領選挙の結果次第では収束に向かう可能性がある。

分裂する世界

第二次大戦後の東西冷戦がどうして始まったかというと、1945 年にアメリカが核爆弾の開発＝核分裂に成功し、この「核分裂がドイツを分割した」という言い方が冷戦史でされることがあります。核をめぐる冷戦の最前線の一つが「ベルリンの壁」で、これを越えようとして 29 年間に命を落とした人は百数十人と言われています。しかし今、冷戦が終わって人類は進歩したのかと言えば、おそらく一日数百人以上がウクライナでは亡くなっている。冷戦の方がむしろ人道的だったのではないかという議論すらあるほどです。

現在、米大統領選挙をめぐって、「もしトラ」だとか「ほぼトラ」だとか言われておりますけれども、アメリカの中での共和党（トランプ）と民主党（クリントン、バイデン）との対立、アメリカ政界の分裂というものがウクライナの分裂、国際社会の分裂の背景にはある。孤立主義的なトランプ前大統領・共和党とリベラル介入主義・覇権主義のバイデン大統領、この対立が今年 11 月にどう決着するかということが、ウクライナ戦争の帰趨にも大きく関わっており、世界中が注目しているところです。

ウクライナ「国境」の変遷

次頁の図は、ウクライナの国境線の変遷を示しています。「ウクライナ」のクライというのはスラブ圏のどこでもある言葉で、辺境とか端っこ、地方を意味する普通名詞です。ロシアでは地方という行政単位。クロアチアにもクライナ地方というのがあります。ではどこから見てウクライナは辺境なのか。モスクワではありません。実はポーランドから見た端

っこだというのが定説です。現在のウクライナの地は 14 世紀から 17 世紀にかけてポーランド・リトアニア共和国の支配下にありました。

17 世紀の半ば、今ちょうど戦争が行なわれているザポリージャ地方のコサック、ボフダン・フメリニツキーが反乱を起こします。コサックというのは、ウクライナ中南部の草原地帯に住み着いた人々による軍事的共同体ですが、彼らはコサック国家を立てて、1654 年にモスクワと同盟関係を結びます（ペレヤースラウ条約）。同じ東方正教であるロマノフ王朝の庇護下に入ってポーランドからの独立を目指したわけです。その意味で、地図の黄色い部分がコアのウクライナと考えると、その後、コサック国家はロシア帝国に吸収され（1721 年）、ロシア帝国はさらに西のポーランド領を侵食して版図を広げました（黄緑色の部分）。クリミア半島は女帝エカテリーナの時期に帝国の軍事拠点となります。

1917 年のロシア革命の後、ソ連邦を結成する際に、ソ連の政治家たちが現在のウクライナ国境線を決めた側面があるわけですが、地図のピンクの部分が 1922 年にウクライナに加えられました。これは革命の指導者レーニンが定義した。ドン川中流地域で石炭が採れるということで、それまで農業地帯であったウクライナを工業化するためにも、ドン・コサックの故地、ドン盆地（ドンバス）と南部地方とをくっつけたと言われています。こうしてロシアのドン川は分断された。

スターリンが併合した西部ガリツィア地方

図のモスグリーンの部分は、かつてロシア帝国に入ったことのない地域で、特殊なカトリック（儀式スタイルは正教会で人事権はローマ教皇が持つ東方典礼カトリック教会）の地域です。もとはハプスブルグ帝国領で、ハリチナ地方とかガリツィア地方と呼ばれています。この土地をスターリンが 1939 年に第二次世界大戦が始まった時に併合したものですから、これに反発した人々がナチス・ドイツと一時提携して反乱を起こしました。独ソ戦で、ソ連はウクライナ、ベラルーシ、バルト三国をドイツに占領され、モスクワのすぐ近くまで攻め込まれたわけですが、1944～45 年にこれら地方と東欧を解放し、ドイツを敗北に追い込みました。こうしてガリツィア地方などはソ連のウクライナ共和国に組み入れられた。しかし、解放後もソ連に対する抵抗運動を長らく止めなかった人々がいました。また、西側の治安機関が関与して、第二次大戦後多くの人々がカナダに移住しました。カナダのウクライナ人コミュニティは現在 150 万人を擁しています。その中には一部ナチスと協力して戦った兵士たちの子孫（ロシアの言うネオ・ナチ）もいるわけで、このウクライナ戦争では、カナダ政府やこの移住ウクライナ人たちが大きな支援を行っていることは昨年９月のカナダ議会でのゼレンスキー大統領の演説時、「ロシアと戦った」ナチの老兵を称揚して議長辞任の醜聞に発展しました。

ちなみに、1989 年までこの地域は宗教的な自由はありませんでした。冷戦が終結してゴルバチョフとローマ教皇が会った直後に宗教的自由が与えられると、この人たちは人民戦線という有名な組織を作って、自由化運動を始めました。したがって、ウクライナの西部地域のナショナリズムと東部地域のナショナリズムとの間に、宗教的、言語的、文化的な違いがある。同じウクライナと言っても、レーニンが定義したウクライナなのか、それともロシア帝国に一度も入ったことのない地域のウクライナなのか、「二つのウクライナ」があるわけです。これが、ウクライナ内部での東西間の「文明の衝突」です。

フルシチョフがクリミア半島を行政的に移管

歴史的に一度もロシア帝国に属したことのないガリツィア地方を併合したのがスターリンの過誤だとすれば、それまでウクライナの固有領ではなかったクリミア半島を 1954 年に法的手続きを無視してウクライナ共和国へと行政的帰属替えをしたのはフルシチョフの過誤でした。60 年後の 2014 年 3 月、プーチン大統領がクリミアを再び併合した時、キーウの政権に不満で、自治・独立を呼号してきた多くのロシア人がこれを熱狂的に歓迎しました。約千年前のウラジーミル大公受洗の地であるクリミア半島は、ロシアの「キリスト教化を象徴する聖地」であり、同時にロシア帝国以来の「軍事的拠点」セバストポリがある、まさにロシアを象徴する場所なのです。

1991 年 8 月にソ連で保守派がクーデターを起こした時、ゴルバチョフ氏はここクリミア半島にいたわけです。クーデターの首謀者はソ連共産党政権の中の保守派ですが、ゴルバチョフ氏の監禁を実行したのはウクライナの KGB や軍産複合体の幹部でした。このクーデターはすぐに失敗し、モスクワではエリツィンと民主派が勝利して、その後急速にゴルバチョフの発言力は低下していったわけですが、このクーデター失敗直後にウクライナで何が起きたか。クーデターに関与した共産党保守派グループが翌日には西ウクライナの民族主義者たちと和解ないし野合して、議会で独立に走ったのです。これが 91 年 12 月のソ連崩壊を促した。

あるいは 91 年 11 月、ゴルバチョフ氏は「あと 150 億ドル西側が出してくれればソ連は形だけでも維持できる」と言ったわけですが、それを蹴ったのが英国政府など西側でした。ゴルバチョフ改革に西側はみんな賛成をして拍手を送ったけれども、お金は出さなかった。これがソ連崩壊をもたらした。

「ロシアも敵だ」ネオコンが左右する米外交

したがって、旧ソ連の国境というのは、独立した各共和国で理解が違っているというだけでなく、西側でも特にアメリカやカナダの人たちの間でも大きな違いがありました。1991 年 12 月に米ブッシュ（父）政権がソ連解体後のロシアの独立を認めた時、安全保障上はロシアが旧ソ連の核兵器を管理する、現状の国境線を保全し維持するというのが前提でした。

このコンセンサスにアメリカの中で「ノー」と言った人たちがおります。アメリカとカナダに逃れたディアスポラ（民族離散）の人々がそうですが、やはりソ連だけでなくロシアも敵だと言ったのが、国防次官のポール・ウォルフォビッツです。彼は「ロシアも敵だ」というテーゼを出します。その考え方をアメリカの外交政策に最も大きく反映させたのが、つい先日退任の発表があった国務次官のビクトリア・ヌーランドという女性です。彼女が 2014 年からつい最近までアメリカのウクライナ政策の事実上の司令塔でした。夫君はロバート・ケーガンという有名なネオコンの理論家で、「ロシアは敵だ、ヨーロッパ人は戦え」と最も大きな声で主張した人です。簡単に言うと 2014 年のマイダン革命＝ヤヌコビッチ政権打倒のクーデターを仕掛けたのがこのネオコン・グループでした。残念ながらこれは日本のマスメディアでほとんど報道されていませんが、毎日日本のマスコミが報じている米「戦争研究所」は彼らの宣伝機関です。

プーチン大統領がネオ・ナチだとか、非軍事化だとか主張する背景には、実はこういう文明的な対立があるわけですが、これがウクライナ内部の東西対立と相まって、ぶつかりあっているというのが今の状態です。

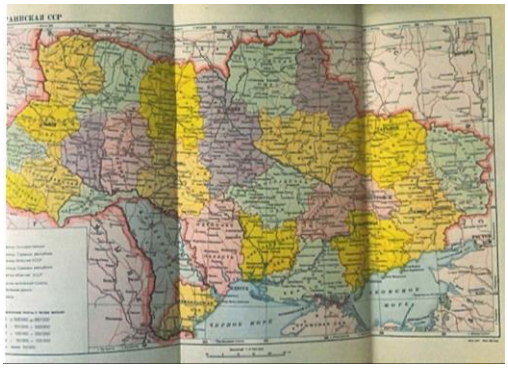
ウクライナ内の東西対立

2014 年の米国のネオコン系が使嗾したクーデターの後、ウクライナ大統領に就いたのはポロシェンコという NATO 寄りの政治家で、憲法に NATO・EU 加盟を書き込みますが、あまり人気がなくて 2019 年の選挙で敗北、かわって対ロ和平派のゼレンスキー氏が当選しました。ゼレンスキー大統領はご存じの通り喜劇俳優の出身ですが、東ウクライナの生まれです。ウクライナ人はみんなウクライナ語を喋ると思われるかもしれませんが、彼はロシア語話者で大統領になるまでウクライナ語が喋れなかった。それどころか歴代ウクライナ大統領は、みんな大統領になってからウクライナ語が喋れるようになっています。しかし 2014 年のクーデター政権はロシア語を禁止した。

1861 年のイタリア統一で、「青年イタリア」の指導者マッツィーニは、「われわれはイタリアを作った。これからイタリア人をつくる」と言いました。その意味では、1991 年末にソ連崩壊でウクライナが独立した時に国境線はそのまま引き継がれたわけですが、言葉だとか文化だとか歴史のアイデンティティだとか、ウクライナという国を形づくるものが十分に熟成されてこなかった。それどころか東西対立がずっと続いた。これを私たちは過小評価したのではないだろうかというのがここで申し上げたいことです。

クリミア半島は誰のものなのか

ちょっと珍しい地図があります。ウクライナという国を考える時、もう一つの問題は、クリミア半島は誰のものなのかということですが、これは 1947 年のソ連地図です。



ウクライナが独立したのは 1991 年ですが、実は 1945 年から国連原加盟国なんですね。ソ連という国は国連創設時から 3 票持っていて、ベラルーシとウクライナがそれぞれ国連に加盟していました。この時クリミア半島はどこに所属していたかと言うとロシアです。これを、1954 年にフルシチョフが、ペレヤースラウ条約 300 周年記念として、行政的にウクライナに編入した。

日ロの平和条約交渉で、日本側は「固有の領土」＝歴史的に北方四島は一度も外国の領土になったことがないという意味で固有の領土だという言い方をしますが、その意味では 1954 年までクリミアはロシアの固有の領土だった。しかも、ソ連時代にクリミアの黒海艦隊は核戦略部隊として一貫してクレムリンの直轄下にあり、ソ連崩壊後も CIS 協約に従ってロシアの管理下に置かれてきました。

ウクライナ側は現在「クリミア半島を奪還する。黒海艦隊は NATO 傘下に入れる」と主張していますが、実はこの議論は国際法的には成り立つのか疑問があるわけです。ゼレンスキー氏が「1991 年の国境線に戻れ」というのは一見正論ではあるのですが、しかし、これは歴史をもう少し正確に見て、何をどの段階で合意していたのか、確認していかなければならない。これは今の戦争の落としどころをどうするかということと関係してくるのだと思います。

国民国家になり切れなかったウクライナ

ロシア語とウクライナ語との違いは、それほど大きなものではないと言われます。元々は同じスラブ民族で、同じキリ

ル文字（教会スラブ語）を使っているわけですから。東方正教会＝キリスト教文明としてのルーシ、スラブ世界を国民国家に分割するということは、そんなにすっきりしたものではなかった。

ロシア軍が占領しているウクライナ東南部地域はやはりロシア語話者が多い。1926 年のソ連時代最初の統計では、キーウでもオデーサでも 1/3 はロシア人、1/3 はウクライナ人、そして 1/3 はユダヤ人となっていました。2021 年 2 月の調査では、ウクライナ国民の 41%はロシアに好意的、しかし 42%は否定的でした。ウクライナ人の半分はロシアに親戚を持っています。

したがって、これまでの政治プロセスは、アメリカ・NATO がウクライナに強力に介入する 2014 年までは、選挙結果を見ると東西のディバイドを現実的に反映していました。大統領選挙も、1994 年クチマ（東）、2004 年オレンジ革命・ユーシェンコ（西）、2010 年ヤヌコビッチ（東）と、東西が交代する結果が出ていました。そのパターンが崩れたのが米国と NATO が介入した 2014 年ということです。

紛争の北米要因～ネオコンと NATO 東方拡大

東西交代のバランスが崩れた理由は、この紛争における北米要因ということだろうと思います。

NATO の東方拡大には、ロバート・マクナマラやジョージ・ケナンなど、冷戦期の外交官・専門家のほとんどが立場を越えて反対していました。東方拡大を推進したクリントン大統領は、戦後世代初の民主党リーダーだったわけですが、1996 年の大統領選挙で、スイングボートと言われるカトリック系のポーランド移民票、労働者の 1000 万票が欲しくて、ポーランドとハンガリー、チェコの NATO 加盟を進めました。エリツィンのロシアはこれに反発しましたが、ソ連崩壊後の混乱と国力低下の中で押し切られた。

その中で、ネオコン・グループが台頭し、アメリカの外交政策に大きな影響力を持つようになります。先ほどのヌーランド国務次官やその夫のケーガン氏らですね。ウクライナ戦争で、「米戦争研究所によると」という情報や数字が毎日のようにテレビに出てきますが、これは政府のシンクタンクではありません。アメリカ軍の発表でもない。戦争研究所はネオコンの民間研究所です。この 10 年間ヌーランド国務次官とそのグループが事実上アメリカの対ロ政策を左右してきた。アメリカという国では、組織された少数派が圧倒的な力を持ちうる。軍産複合体しかり、全米ライフル協会しかりですが、ネオコン・グループが持っている力もすさまじいものでした。

米 NATO 軍がウクライナ軍を秘密裏に訓練

公正のために言えば、ヌーランドさん自身もマイダン革命後のウクライナ東部紛争でミンスク合意の取りまとめに努力しました。しかし、これを実現したドイツのメルケル元首相が 2022 年末に明らかにしたように、じつは東部ドンバスの軍事拠点の建設のための時間稼ぎであって、これを守るつもりはなかったとメルケルも明言しているわけです。

それどころか『ニューヨーク・タイムズ』紙が、アメリカのメディアはそれでもすごいと思いますが、「CIA は 2014 年にロシアとの国境地帯に地下秘密情報基地を 12 か所作っていた」とスクープしました。以来、アメリカと NATO 軍は公然・非公然にウクライナ軍を訓練してきたわけですが、その中の優等生がキリロ・ブダノフ情報局長です。ウクライナ軍のブダノフ情報局長は、クレムリンへのドローン攻撃やベルゴロド製油所攻撃などロシア国内での爆破事件の指揮者として注目されています。ユーラシア主義の哲学者ドゥーギン氏の娘が乗った自動車の爆砕も彼の作戦だったと言われています。

また、ロシア義勇軍、自由ロシア軍団といった部隊が国境を越えてロシアを攻撃していますが、そのリーダーの一人はイリヤ・ポノマリョフという人です。彼はフルシチョフ時代のソ連共産党国際局長ボリス・ポノマリョフの一族です。つまり、今のウクライナ戦争をよく観察すると、ソ連邦とソ連共産党の崩壊過程がいまだに続いている側面がある。ナショナリズムだけで見ると間違える感じがします。

3 日で終わらなかった特別軍事作戦

では、現在のウクライナ戦争はどうなっているのか？

今日（3 月 9 日）は、2022 年 2 月 24 日から 745 日目です。3 日で終わるはずの特別軍事作戦が終わらなかったのは、実は軍事作戦が発動される 1 日前にそれをキーウに伝えた人物がいたのです。キレエフという東ウクライナの銀行家が、侵攻計画と攻撃目標情報を入手して、これをブダノフに伝えた。ブダノフはカナダ軍顧問団やアゾフ連隊とともに、ロシア軍の空挺部隊が降りてくる空港で待ち構えて、これを撃退した。こうしてロシア軍のキーウ攻撃は失敗したわけです。

私は、プーチンはキーウで市街戦をやるつもりはなかったと思います。一種の象徴的な保障占領を行うつもりで侵攻した。特別軍事作戦はプーチン周辺の旧 KGB 人脈だけで決定したというのがほぼ定説になっています。おそらく十数万のロシア軍は十分な計画や準備がないまま進軍を命じられ、当然のごとく失敗してしまったのです。本当にウクライナ占領やキーウでの市街戦を展開するには動員数はいかにも少ない。

ただし、ロシアとウクライナの和平交渉は、こちらが本筋だったと思いますが、侵攻直後から始まりました。キレエフ氏はその交渉のウクライナ側代表でした。ところが 3 月初めに彼はなんとウクライナ保安局（旧 KGB）によって射殺されてしまいます。現在は名誉回復して、キレエフは「ウクライナのゾルゲ」であったとされていますが、戦争当初はロシアもウクライナも情報が錯綜し、混沌としていたことが伺われます。

イスタンブール合意を妨害した米英政府

この和平交渉では、2022 年 3 月末イスタンブールでの交渉で、「ウクライナの中立」と「領土問題の棚上げ」というシナリオで合意がほぼ成立しつつありました。このイスタンブール合意の内容は、詳細がわからないままだったのですが、23 年 6 月にモスクワで開かれたアフリカ首脳会議でプーチン大統領が明らかにしました。

それによると、「ウクライナの恒久中立と安全保障条約」案をロシア側が準備し、ゼレンスキー政権との交渉の末 18 条からなる平和条約案で合意ができた。非軍事化といっても、ウクライナ軍は 10 万人体制にする（当時ウクライナ軍は 25 万人体制で、これに総動員令をかけて 90 万人ぐらいになっていた）。同国は NATO 加盟を諦めて「中立」に戻る。その際の保障国は米英中露トルコとするという内容だった。この合意に従って、モスクワは 3 月末にキーウから撤兵したが、結果的には「騙された」とプーチン氏は語りました。

イスタンブール合意は結局、実行されませんでした。昨年 11 月、和平交渉のウクライナ全権代表だったダヴィド・アラハミヤ氏（ゼレンスキー与党「国民の僕」会派長）は、「合意を妨害し、結果的に戦争を長引かせたのは英米政府、とくに英国のジョンソン首相がキーウにやってきて、和解すれば武器を提供しないとゼレンスキーに圧力をかけたからだ」とテレビで衝撃的な証言を行いました。

確かに 22 年 3 月末にバイデン大統領が「プーチン体制を弱体化させる」と発言し、4 月 9 日にはイギリスのジョンソン首相が突然キーウを訪問しています。この時、ウクライナに圧力をかけて、イスタンブール合意に署名させなかった。交渉は 5 月くらいまで続きましたが、その間に「ブチャの惨劇」といった情報戦が加わり、結局この戦争は 2 年間を超える戦争になってしまったというわけです。

このイスタンブール合意は、『ウォールストリート・ジャーナル』紙が今年 3 月 1 日に、その全文なるものを掲載しました。報道によれば、ウクライナ中立化のほかに、「クリミア半島はロシア領とする」「東部ドンバス 2 州の帰属はプーチン・ゼレンスキーの交渉に委ねる」ということで、領土棚上げの新しい情報が入っています。

私は今アメリカ政府の中で、やっぱりロシアとの和平交渉、つまりイスタンブール合意をベースにその後の変化を勘案したウクライナ分割案が密かに検討されているのではないかと思います。そうでないと、『ニューヨーク・タイムズ』や『ウォールストリート・ジャーナル』の記事がなぜ今出てきたのか、プーチン・ロシアとの交渉を裏書きするような報道をアメリカの主要メディアがなぜ流すのか、理解できません。もっとも 4 月になって、仏ロ間の国防相電話などでロシア側は、イスタンブール合意そのものは現在死文化したと、4 州併合といった新しい現実を踏まえるべきだと主張しています。

反転攻勢の失敗から膠着状態へ

ウクライナ戦争は、昨年 6 月から始まったウクライナ側の反転攻勢が失敗に終わり、軍事的には消耗戦に陥っています。消耗戦ですから体力比べです。体力的にどっちが強いか、これは明白です。米軍や NATO 軍の顧問団、あるいは国際義勇軍という形で特殊部隊が数千ー数万の単位で入っている可能性は否定できません。「ウクライナは NATO に入ってないが、NATO はウクライナに入っている」といわれる所以です。

このなかでかつて 5200 万人だったウクライナの人口は、最近では半分近くに減っている。その中で 27 歳から 60 歳までの動員可能な予備の兵士数は約 200 万～300 万人で、うち 90 万人をすでに動員している。この 2 年間の兵士の損耗率は国家機密なので正確には分かりませんが、かなりの死者を含めた損耗が生じていることは間違いありません。ポーランド軍の退役将軍にはウクライナの犠牲者は 100 万のオーダーだという人もいます。

あるいは戦車の数。ザルージヌィ前総司令官は「300 台の戦車があればクリミア奪還も可能だ」と 2023 年 1 月に英『エコノミスト』誌に書きました。結局、アメリカもドイツも戦車を出しましたが、ドイツの最新鋭戦車レオパルド 2 は、ウクライナが反転攻勢を仕掛けた初期にかなりの部分がやられました。ドニエプル川の攻防戦で、ロシアの頑強な対戦車防衛線（スロヴィキン・ライン）の前に壊滅的な打撃を受けたわけです。最近、東部アウデェーエフカの攻防戦が注目され、いまはチャソフ・ヤルの戦いが重要ですが、最新の欧米の兵器はあまり機能せず、100 年前の第一次世界大戦のような塹壕戦・消耗戦になりました。ミサイルの数でも兵員数でもロシアが優位です。

と同時にこの戦争は「ドローン（無人機）の戦い」です。ウクライナ戦争は、戦車やミサイルよりもはるかに安価なドローンやロボット兵器が大量に飛び交う一種の「実験場」になっています。ウクライナは最初トルコ製のドローンで優勢に立っているように見えましたが、ロシアもイラン製ドローンを調達し国内生産を始め、瞬く間にドローン大国となり、軍事生産能力を急拡大させています。この戦争でロシアを弱体化させようとした NATO の戦略は裏目に出て、強力なロシア軍をこの 2 年間に作り上げてしまうという、逆説的な事態が起きています。ロシア弱体化戦略の失敗は顕著ですが、すこしでも第二次世界大戦など歴史を知っていればロシアの対応能力の高さは自明だったはずです。英米指導層のロシア認識での無知と偏見がウクライナを滅ぼしかねない。

対ロ経済制裁も効果あがらず

経済制裁の効果もあまり上がっていません。とくにロシア産天然ガス・原油の輸入を禁止ないし制限することで、ロシア経済の収入源を断つという見込みも、これまた裏目に出ました。米欧諸国はロシアの原油価格を 1 バレル 60 ドルに上

限設定したわけですが、インドとか中国がロシアのエネルギーを安く大量に買って、実はアメリカやヨーロッパに転売している。

サイモン・ハーシュというアメリカのピューリッツァー賞を受けたジャーナリストは、「ウクライナ軍の戦車の燃料は、ほとんどがロシアの密輸品で、1 ガロン 400 ドルとアメリカの 100 倍も高い。これがアメリカの支援金＝つまりアメリカ国民の税金で支払われている」と言いました。あるいはロシアの天然ガスは、今もウクライナを通るガスパイプラインで東欧諸国に送られているのですが、これはまだ止めていない。

ですからこの戦争は、ロシア側にも米欧側にも戦略的な誤算があって、非常にちぐはぐな様相を見せている。消耗戦で体力勝負になった結果、いい悪いは別として、ロシア側にも国民的な一体感が生まれて、昨年秋以降、戦争の構図はそれまでとかなり違うものになってきています。この戦争を仕掛けた欧米日の政権やマスコミの責任も大きいと思います。

ヌーランド国務次官の引退が意味するもの

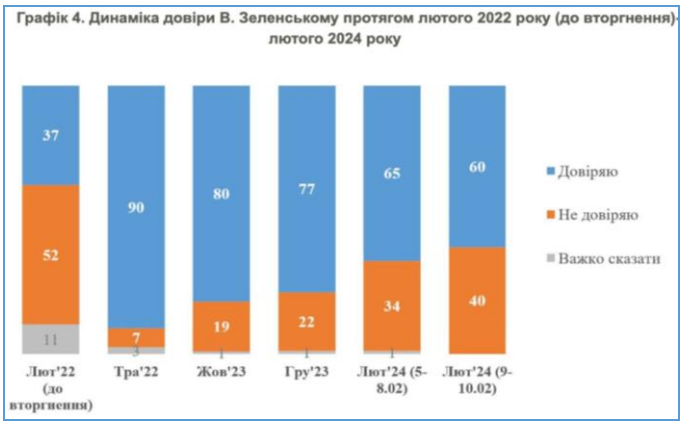
この数か月間、ゼレンスキー政権の内部がバラけてきているように見受けられます。

2014 年のマイダン革命以来のグループ＝ポロシェンコ前大統領や 2 月に解任されたザルージヌィ前総司令官など「クリミア奪還」を掲げ NATO 拡大路線に忠実な人たちと、これに対して、軍事侵攻開始直後にロシアとの停戦交渉でイスタンブール合意をまとめたアラハミヤ氏だとか、23 年 1 月まで大統領顧問だったアレストビッチ氏といった人たちとの対立ですね。ゼレンスキー大統領も本来は中立論者で、NATO 直結ではない。3 月末には、ウクライナ安保会議の書記だったルハンシク州の政治家オレクシー・ダニロフも解任されましたが、2019 年 10 月以来ゼレンスキーのドンバス戦争を仕掛けてきた人物です。

この戦争の落としどころをめぐる問題が、この数か月間ウクライナのリーダーシップを次第に分割して、この圧力の結果、アメリカのウクライナ政策の最高責任者であったヌーランド国務次官が引退せざるを得なくなったと私は見ています。彼女に代わって国務省の次官に就いたのは、米軍のアフガニスタン撤退を担当した外交官ジョン・バス氏です。その意味では、アメリカもまたアフガニスタン的な紛争の終焉を考え始めているという説がないわけではありません。しかし、これはまだバイデン大統領の一般教書演説でもはっきりしていません。むしろ、ウクライナの敗北がトランプ勝利に結びつくことから、バイデンは妥協もできないとしたらウクライナ国民には最悪の結果を招いています。

戦争のゼレンスキー要因～低下する人気

この戦争における「ゼレンスキー要因」というものをどう考えたらいいか。この 2 年間、ゼレンスキー大統領は世界のスーパー・スターのような存在で、「T シャツを着たチャーチル」とも言われました。ところが、彼の虚実を含めたイメージを報じてきたシュラスターというジャーナリストが、米『タイム』誌に「ほとんど見る影もない、笑わないリーダー」という衝撃的な論文を昨年 10 月末に発表しました。



（グラフの青が支持、オレンジが不支持／22 年 2 月～24 年 2 月）

ゼレンスキー大統領の人気は最近大きく低下しており、ロシアの侵攻直後の支持率 90%から落ちています。2024 年 4 月の最新のデータでは、23 年 9 月に 42%であったゼレンスキーの活動への支持は24年2月で22%へと半減しています。2022 年 4 月に 74%であったわけですが 23 年 4 月に 58%、それから 1 年で 22%です（『レーティング』社調査）。

今一番人気があるのは、この 2 月に軍総司令官を解任され、その後イギリス大使に任命されたザルージヌイ氏です。彼は総司令官に任命された直後の 2021 年 7 月に「われわれは赤の広場に戦車で行く」という刺激的な発言をした NATO 直結の軍人ですが、この 3 月初めの世論調査では、今すぐ大統領選挙をやれば「ザルージヌイ 67%対ゼレンスキー33%」と、ダブルスコアで勝つだろうと言われています。

ウクライナの大統領選挙は、本来は今年 3 月末に行われるはずだったのですが、ザルージヌイ人気が高く、ゼレンスキー人気が低下したために、戦争継続を理由に少なくとも 90 日間延期されました。しかし、ゼレンスキー大統領の任期は法的には 5 月 20 日までなので、それ以降は正当性の危機が生じることになります。この段階になって、選挙を主張するポロシェンコ大統領系などマイダン革命派の古い幹部たちと当初は対ロシア和平派だったゼレンスキー・チームとの間の亀裂が激しくなってきています。

「朝鮮半島シナリオ」をめぐる論争

ゼレンスキー・チームの中のもう一つの分裂は、「朝鮮半島シナリオ」をめぐる安全保障会議の論争です。これは昨年 1 月の出来事ですが、アレクセイ・アレストビッチ大統領顧問が、「朝鮮半島シナリオ」つまり今や領土の 2 割を占めるロシア占領地での紛争凍結を提唱し、ダニロフ書記（今は解任）ら主流派と袂を分かちました。

ご案内のとおり、ロシアは 22 年 9 月に東部のルハンシク（ルガンスク）とドネツク、南部のザポリージャ（ザポロージェ）とヘルソンの 4 つの州を併合しました。一応「住民投票」で賛成多数を得たという形をとっていますが、軍事力を背景とした併合です。そうしてロシアはドニエプル川をはさんで長大な地雷原を敷設し、あるいは「竜の歯」と呼ばれる対戦車障害物を作って、防御ラインを固めています。

「朝鮮半島シナリオ」はこの現実を認めて戦争を現状凍結するというもので、朝鮮戦争では 38 度線を停戦ラインとして休戦協定を結んだわけですが、それと同じような形で紛争を解決しようという案です。

論争の直後に、アメリカではブリンケン国務長官が「クリミア奪還は非現実的だ」と言い始めました。ヌーランド国務次官は「断固奪還」ですね。ここから私は、アメリカ国務省の中でも、ややリアリストのブリンケンと、ユートピアン的なネオコン・グループの分裂が始まったと思います。そういうわけで、アメリカの中のリアリストと反対派、ウクライナの中の中立派と主戦派が、それぞれ共振しあう形で対立が起きてきています。

結果が見えているロシア大統領選挙

もちろんモスクワにも反対派がいないわけではありません。とくに侵攻直後はロシア各地で反戦集会やデモが起こりましたし、動員を逃れて数十万人の若者が国外に出て行ったわけです。

しかし、NATO の東方拡大について言えば、私の見るところ、これに賛成する政治勢力はありません。先日刑務所内で死亡した反対派指導者アレクセイ・ナワリヌイ氏も「クリミアはロシアのものだ」という点では変わりがないわけです。

3 月 15 日から行われるロシア大統領選挙が、すでに結果が決まっている「翼賛選挙」であることはそのとおりですが、しかし、プーチンに対して真正面から反対する政治勢力や政治リーダーがいないのも事実です。

私は 2022 年の段階で「3 人の大統領の負け比べ」という言い方をしました。バイデン大統領、ゼレンスキー大統領、プーチン大統領が、今年行われる大統領選挙の結果どうなって、果たしてどういう形でこの紛争の結末を迎えるか。

今のところプーチン大統領の支持率は 80%以上と言われていますけれども、この選挙で出てきた「新しい人々」という政治グループ、これはクレムリンのキリエンコ副長官（政治担当）が作ったグループですが、20～30 代の若者世代に 30%くらいの支持があります。この「新しい人々」が今度の選挙での小さな変化かもしれません。いずれにしても、結果は最初から分かっているわけです。ロシア人は「川の中では馬を乗り換えるな」という言い方をします。少なくとも特別軍事作戦が行われている間は、私は大きな変化はないのではないかと思います。

G7 対 BRICS～変化する世界の構図

プーチン大統領は、2 月 29 日の年次教書演説で、ウクライナの戦況について「ロシア軍が主導権を握っている。さらに多くの領土を解放している」と戦果を強調する一方、「2030 年までの社会プログラム」という内政の基本目標を発表しました。その中では、出生率の増加や少子化対策、家族の重要性だとか、経済成長とハイテク投資の拡大など、いろいろなナショナル・プロジェクトを打ち出しています。

重要なことは、このプーチン演説や、トランプ系のタッカー・カールソンとのプーチン・インタビューが、国際的にはインドや中国、中東など、いわゆる BRICS 諸国で相当読まれていることです。とくに今、パレスチナ・ガザ地区でのイスラエル軍の攻撃がジェノサイドと変わらない惨状を引き起こしている中で、これをゼレンスキー大統領が支持してしまったこともあり、世界の世論が急速に反イスラエル・親アラブないし反米欧・親ロシアへとシフトしています。親ロシアでないまでも、米欧から距離をとるグローバル・サウスの国が増えています。

今年、ロシアは BRICS 議長国で、カザンで首脳会議が予定されています。昨年 8 月の BRICS 首脳会議では、エチオピア、エジプト、UAE（アラブ首長国連邦）、イラン、サウジアラビア、アルゼンチン 6 カ国の新規加盟が承認されました（アルゼンチンはその後、辞退）。昨年の時点で正式に加盟を希望した国はインドネシアやベトナムなど 22 ヶ国あり、さらに約 40 ヶ国が非公式に加盟を希望していると言われます。

その意味で、BRICS がいわゆるグローバル・サウスの声を代弁する場となり、世界のパワーバランスが G7 対 BRICS という形になってきている。ソ連崩壊から 30 年の時間を経て、全く新しい世界の構図がこの戦争を契機に出てきつつあるわけです。

膠着状態から停戦協議へ、強まる圧力

繰り返しますが、ウクライナ戦争は昨年の反転攻勢の失敗以降、膠着状態に陥っています。その中で、ロシアがウクライナに対し優勢になり、圧力をかけているのが現在の戦況です。ロシアが大勝してヨーロッパまで席巻するようなことは全くあり得ないし、プーチンは NATO との戦争を明確に否定しています。逆にウクライナ軍が赤の広場を戦車で行進することももはやないでしょう。プーチン大統領は、ドニエプル川左岸の防御ラインを固めて、東部南部 4 州の既成事実を認めよという方向に動いている。今後は、西側が構想したロシアの弱体化というシナリオよりも、もっと現実的に「朝鮮半島シナリオ」的な紛争凍結モデルを検討するのはありうることで、私はますますそういう方向が出て来るのではないかと思います。

ゼレンスキー大統領は、ロシアは 1991 年の国境線まで戻

るべきだ、それを前提として和平交渉をやるべきだと主張していましたが、3 月末の CBS インタビューで微妙に立場を変えました。ウクライナが提唱する和平案を協議する会議が 1 月にダボスで開かれましたが、議長を務めたスイスのカシス外相は、和平案の実現のためには「今後はロシアも協議に参加させる必要がある」と言いました。ロシアが撤退するまで徹底抗戦すると主張して停戦を拒否してきたウクライナに対し、グローバル・サウスの参加国からは停戦を説得する発言がより強く出ています。なにより 4 月初めの米 Politico 誌のように、ザルージヌィ系のウクライナ軍幹部の口からウクライナ軍の崩壊の脅威を事実上認める発言も強まっています。

ゼレンスキー政権内部の分岐が目立ち始めていますが、ゼレンスキー氏が今後もリーダーであり続けるのかどうか、もしかしたらイエルマーク大統領府長官が首相になるのではないかという説が最近出ております。なぜかというと、この 5 月 20 日には大統領の法的任期が切れるわけです。マイダン革命派のポロシェンコ前大統領やクリチコ・キーウ市長らは、任期切れ後にゼレンスキー権力の正統性はないと主張して、戦況次第ではマイダンⅡのような反乱を起こさないとも限らない。それを防止するために、憲法的には首相に権限を移して統治を続けるという方法が考えられているようです。

ウクライナ政権の動きとアメリカ大統領選挙の結果によって、この戦争がどういう形で終結に向かうのか、もう少しはっきり見えてくるのではないかと思います。

私は未来の預言者ではありませんので、まだわからないことがたくさんありますが、皆さんとともにこれからも考えていきたいと思います。

＜質疑応答＞

―― ウクライナやロシアの内部の動き、それにアメリカの動きなどが良く分かりました。ウクライナ戦争の局面が変わりつつある中で、「朝鮮半島シナリオ」にしても、何らかの停戦に持ち込むためには、やはり仲介者が必要ではないかと思います。そこで気になるのは、NATO 側で言えばドイツ、それとロシアに近い側では中国です。これらの国がどのようにコミットする可能性があるのか、解説をお願いします。

下斗米　重要な指摘なので、少し補足したいと思います。まず、意外に気がついていませんが、重要な役割を果たしているのはローマ教皇です。なぜならバイデン大統領はカトリック教徒だからです。

ローマ教皇は、このウクライナ紛争は NATO が挑発した側面があると、当初から言っています。たびたび停戦を求める発言をして、つい最近も侵攻 2 周年を受けて「戦争の外交的解決を求める」と呼びかけました。一部で「白旗」発言と誤解されましたが、これはモラルサポートとして非常に巨大だと思います。何より、先のスイス・メディアに対し発言したわけです。

2 番目に、中国は昨年 2 月に紛争の政治的解決をめざして 12 項目の和平案を提案しました。李輝ユーラシア事務特別代表が、この人はロシア勤務 10 年以上のベテラン外交官ですが、昨年も各国を回りましたが、最近またヨーロッパを訪問するなど動き始めています。ダニロフ書記が彼の批判をしたとたんに解任されたことも重要です。

3 番目にドイツです。ドイツのオラフ・ショルツ政権は、社会民主党（SPD）とグリーン・緑の党、自由民主党（FDP）の連立政権です。ドイツのジレンマは大変深くて、タウルスという射程 500km を超える巡航ミサイル、つまりクリミアだけでなくロシア内部まで攻撃できるミサイルを出せという圧力がかかっているわけです。

ドイツではリベラル派の緑の党がむしろタカ派で、ピストリウス国防大臣とショルツ首相の間に温度差があると言われています。つい最近、このタウルス・ミサイルの提供を巡るドイツ国防軍のオンライン会議の情報が漏洩して、ロシアのメディアにすっぱ抜かれ、大騒ぎになった。誰がやったのかよく分かりませんが、参加者の 1 人がシンガポールのホテルから参加しており、情報はここから漏れたと言われています。ただ、タウルスを供与するとドイツが戦争当事国になるということで、国会の採決では否決されており、ショルツ首相は「供与しない」と言っています。あるいはマクロン仏大統領の「NATO 軍派兵」発言に対しても、「派兵はない」とかなり明確に言っています。

ドイツに関連して、中部ヨーロッパの国の動きも大事です。チェコのパヴェル大統領は元軍人ですが、この人がウクライナに 80 万発の砲弾を提供するために各国の協力を取りつけました。しかし同時に、この人は朝鮮半島モデルの支持者なんですね。スロバキアのフィツォ首相はウクライナを支援しつつ、ロシア制裁には反対しています。ハンガリーのオルバン首相はご案内のとおり、もっと明確にロシア寄りの姿勢をとっています。ですから、私はポーランド以外の中部ヨーロッパの国がドイツとどう動くかが、これから決定的に重要だと思います。

最後に、NATO のストルテンベルグ事務総長は元ノルウェー首相です。ノルウェーは 1944 年に赤軍がナチスから解放した国で、同時に 1949 年 NATO に最初に加盟した国でもあります。ノーベル平和委員会がオスロにあることが示すように、東西バランスの国なのです。彼は NATO の中では意外とリアリストで、あまり極端な軍事的オプションをとることには慎重です。一番極端なのがイギリスで、昨年 7 月に国防大臣が次期 NATO 事務総長になりかけたのを潰したのがおそらくストルテンベルグで、任期 1 年延長になった。

もう一人、EU のフォン・デア・ライエン欧州委員会委員長は元ドイツ国防相で、彼女を NATO の次期事務総長にしようという提案に反対したのはショルツ首相です。フォン・デア・ライエンはかなりのタカ派ですから、ショルツは「ノー」を言った。だからショルツ・ドイツの役割というのはとても大きいと言えます。

こんな時代にロシア語のすすめ　第７回

「ペルシア語を目指してロシア語？」

黒田 龍之助

「ロシア語を知っているとほとんどわかってしまうベラルーシ語」

４月です。外国語を始める季節ですね。この春はロシア語を学んでみませんか。

……というような話題を考えたのですが、この先がどうしても浮かびません。似たような話をあちこちで書き散らしていることもあるんですが、それ以前にロシア語を巡る状況は悪化するばかりで、明るい話題が見当たらず、気分がどうにも乗らないことも原因です。

ロシア語の人気が微妙なのは、何もいま始まったことではありません。今年は最底辺だけど、来年こそはよくなるに違いない、いや、これ以上は下がるはずがないのだと、自分を励ますこと数十年。その期待はいつも見事に外れ、最底辺と思われた翌年がさらに落ち込むという、ほとんど底なし沼状態。嗚呼。

本音をいえば、人気は別にどうでもいいんです。負け惜しみじゃありません。世間ではメジャーな外国語、経済的に成長している外国語、明るくて華やかなイメージの外国語がもてはやされることは、分かっているのです。そうでない外国語を選んだことは、なんの後悔もしていません。

ただ、わたしはロシア語教師なんです。授業は教師と受講生で成り立つもの。受講生がいなくなってしまったら、こちらは自動的に仕事がなくなります。現に去年の秋学期、火曜２限のロシア語初級は受講生がひとり。このたったひとりの受講生がずば抜けて優秀で、楽しそうにロシア語を勉強してくれるのが唯一の救いでした。それにしても、一対一の授業は受講生にとって精神的に負担なはず。S さん、最後までつき合ってくれてありがとう。次は中級で会いましょう。

そもそも「外国語のすすめ」って苦手です。わたしの担当する外国語を学ぶと、こんなにいいことがありますよとか、そういうのを喧伝するのってなにか違う。どんな外国語でも、勉強を続けていれば楽しいことが必ずあり、その点ではどの言語も平等なはず。

でもまあ、そんなことはいっていられないので、なにかメリットを考えなければ。

たとえばロシア語は話者人口が多い。かつてに比べれば減ってはいるものの、まだ１億人以上が話しているようですから、世界的に見れば有力言語。さらには国連公用語だから重要だという考え方。大言語主義とでもいいましょうか。

……う～ん、なにか虚しい。

ナントカ語は話者人口が多いから、さらには国連公用語だから、学んでおけば将来きっと有利になる。まるで先物取引のような危険な誘い。そういうのは嫌いです。だいたいわたしはロシア語だけでなく、あれこれいろんな言語を勉強してきて、それも教えるのが商売。その中には話者人口が１千万人とか、100 万人とか、もっと少ない言語だってあります。だからといって、価値が変わるわけではありません。数の力でゴリ押しするのは、多様性の時代に反すると思うのですが、そんな風潮は相変わらず。再び嗚呼。

そういった大言語主義は嫌いですが、それでも影響力のある言語の知識がなければ、勉強が難しい外国語もあります。

たとえばベラルーシ語。かつてベラルーシの首都ミンスクで、ベラルーシ語の夏季セミナーに通ったことがありました。30 年近く前の話です。たった２週間でしたが、そもそもベラルーシ語はマイナー過ぎて、日本では教科書すらロクに手に入りませんでした。だから現地で学べたことは、大きな喜びでしたし、勉強も進みました。

ベラルーシ語には、他の外国語と違う事情が二つあります。

まずロシア語ができなければ勉強できません。ベラルーシ語の教材は、ベラルーシ語そのもので書かれたものを除けば、ほとんどがロシア語で説明されています。英語やドイツ語がほんの少しありますが、それはどちらかというと文法書で、しかもスラブ諸語の知識を前提としている、学術的な内容がほとんど。こういうときは、ロシア語ができて本当によかったと、つくづく感じます。

もうひとつは、ベラルーシ語しかできない人が、たとえベラルーシでもほぼいないことです。夏季セミナーでせっかくベラルーシ語を覚えても、一歩街に出れば、そこはロシア語世界。市場でベラルーシ語を使ってみたら、売り子のおばさんから「なんだって？ ちゃんと人間らしく話しなさいよ」といわれてしまいました。これが首都なんですから、悲しくな

ってしまいます。

ベラルーシ語とロシア語は、とても似通っています。そのため、どちらを使っても通じてしまうというのが現状です。ベラルーシ語に自信のないベラルーシ人も多いし、たまに自信たっぷりの人がいても、そのことばに耳をじっと傾けてみれば、自分の故郷の方言を使っているのに過ぎないこともありました。コミュニケーションではそれでいいのですが、たとえば標準ベラルーシ語の文法書を書こうとしているときには、それでは困ります。

それでも、そのような状況が理解できたのは、ロシア語を通して多くの人から話を聴いたおかげでした。そもそもいくらベラルーシ語が流暢に話せても、ロシア語ができなければミンスクで生活することはできません。日本人には想像しがたいかもしれませんが、そういう現実があるわけです。

しかし、それもまた楽しいんですけどね。

20 年以上前にウズベキスタンを訪れたことは、これまで何度かお話しました。そのとき首都タシケントの大学で、アメリカ人留学生に会いました。わたしがロシア語の授業を見学していたときの受講生のひとりだったのですが、話を聴いてみれば、彼が本当に学びたいのはペルシア語だというのです！

一体どういうことなのか、詳しく聞いてみればこうでした。ペルシア語を志したのはいいものの、アメリカとイランの関係が当時（今も？）よろしくないので、留学できない。そこで似たような言語がないか探したところ、アフガニスタンのダリー語が近いことを知ったのですが、アフガニスタンは当時（今も？）外国人が勉強するどころではありません。そこでさらに探すと、タジキスタンのタジク語は文字こそロシア語と同じキリル文字ですが、文法構造は極めて近いという。しかしタジキスタンも当時（今も？）政情が不安定です。途方に暮れていたところ、ウズベキスタン西部でタジキスタンと国境を接する地域には、タジク語話者がいることを知りました。ウズベキスタンだったら留学ができます。でもそのためにはロシア語と、さらにはウズベク語ができないといけないので、こうしてロシア語の勉強を始めたというのです。

壮大な話ですよね。でもこの青年は悲しむどころか、むしろいろんな言語を学べるのが楽しくて仕方がない、という感じだったのです。

こういうことはときどきあります。

たとえばわたしのゼミ生で、ヨーロッパ北部のフリジア語に興味を持っている学生がいるのですが、フリジア語を学ぶためにはオランダ語ができなければ、基本的な文献を読むこともできません。南アフリカのコサ語に興味を持っている元ゼミ生は、同じバントゥー語群に属するスワヒリ語を独学しながら、コサ語の文法を掴もうとしています。学習教材が限られている外国語を学ぶためには、このような遠回りをしなければならないことがあります。それなのに楽しそうに学習している姿を見ていると、忘れていたなにかを思い出した気がします。そうです、何語でもいいから、いっぱい勉強した方が楽しいんです！

４月です。外国語を始める季節ですね。この春は何でもいいから、なにか学んでみませんか。

本の紹介

MOCT（モスト）「ソ連」を伝えたモスクワ放送の日本人

第 21 回 開高健ノンフィクション賞受賞作

青島 顕 著

集英社

四六判 264 頁

価格 1980 円(税込)

「こちらはモスクワ放送です」。

米ソ冷戦の時代、毎日ラジオを通じて呼びかける声が届いた。雑音混じりで少し聞き取りにくかったけれど、それは間違いなく日本海を越えて社会主義国ソ連からやってくる日本語放送の声だった。

著者は高校生の時にたまたまモスクワ放送を聞いたという。アナウンサーが楽しそうに語るロシア語講座にひきよせられた。発音やイントネーションに不自然なところがない日本語に、「いったいどんな人が放送しているのか」と思う。

40 年後にこの謎に挑み、かつてモスクワ放送に携わった日本人たちの群像を描き出したのが本書である。

「MOCT」はロシア語で「橋」を意味する。本書を読むと、確かに日本とソ連（ロシア）の架け橋になろうとした人々の姿が見えてくる。

日本向けモスクワ放送は 1942 年に始まった。初期の日本語放送を支えたのはコミンテルンの活動家としてモスクワに滞在した日本の共産主義者やその家族たちだった。戦後、シベリア抑留の民主運動活動家でそのままソ連に留まった人たちが加わり、やがて 1970 年代や 80 年代には「何か新しいことをやってみたい」とか「学んだロシア語を活かして仕事がしたい」、「本当のソ連社会を見てみたい」と日本からも若者

が合流するようになった。

今やもう消滅し、「壮大な失敗作」だったと歴史の彼方に押しやられた観のある社会主義ソ連。しかし、そこで生まれ育ち、人生のある部分を過ごした多くの人々が今もなおロシアや旧ソ連諸国で暮らしている。ソ連時代の残滓は、ロシアをはじめ独立国となった各国に残され、その社会に何らかの特徴を与え続けている。

社会主義思想に共鳴してプロパガンダ（政治宣伝）に協力した人も、何らかの疑問を持ちつつ生活するために働いた人も、日本とソ連（ロシア）の間に橋を架けるために一生懸命だった。政府公式発表を淡々と読み上げながら、間に挟み込む時候の挨拶や音楽などで、公式発表とはちょっと異なるニュアンスを伝えたり、時には検閲のスキを突いてビートルズを流したり、読者の手紙への丁寧な返信を続けたりと、さまざまな工夫と努力で日本の受信者の心をつかんでいった。

モスクワ放送はソ連崩壊後もロシア国営ラジオ「ロシアの声」として継続されたが（2017 年に完全休止）、ソ連時代を通じてこの放送に関わった人たちにとっては、ソ連と社会主義の崩壊は自らの人生の一部を否定されたように感じる瞬間が何回もあったに違いない。1966 年生まれの著者には元共産党員や社会主義シンパの複雑な心境を理解しきれない部分も当然あっただろう。しかし、その隙間を著者は生真面目で丹念な取材によって埋めていく。そしてたどり着いた結論が、本書末尾に書かれた 3 行だ。

「あの放送に関わった人たちは、夢ばかり見て、現実から逃避したドン・キホーテではない。試練や制約を乗り越え、肉声を通じて二つの国、そして世界に橋をかけようとした人たちだ。その努力がいつか報われる日が来ることを私は信じる。」（本書 251 頁）

さわやかな終わり方である。

ひるがえって現在の日本でも、ウクライナ戦争による「反ロシア」「嫌ロシア」の強い風圧の中、それでもこの国を理解するために交流を絶やしてはならないと、ロシア語教育やロシア研究、またバレエや音楽などの文化交流に地道に取り組む多くのロシア関係者がいる。私たち JIC もまた旅行・留学の分野で日ロ人的交流の土台を維持すべく、逆風に立ち向かっている。

プーチン大統領が 80%もの得票率で再選されたロシアにも、ウクライナ侵攻に疑問を持ち、戦争にとられた家族を早く返せと停戦和平を待ち望む人たちがいる。非友好国に指定されたとはいえ、日本語やお茶、折り紙、生け花など日本文化を変わらず愛好する人がいる。はるばる日本までサクラを見に来る観光客もいる。

本書は、それら異なる世界との間に「架け橋」をかけようとするすべての人への暖かいエールであると思う。(F)

＜日ロ交流情報＞

日露ビジネス交流会(4 月 5 日)

19 名が来日、東京・築地で開催

この 4 月、ロシアから 19 名のビジネス関係者が来日し、日露異業種ビジネス交流会が東京で開催されました。会場は築地の「すしざんまい・奥の院」。日本側からもほぼ同数の参加者が集まり、互いに関心のあるビジネス案件を話し合うなど、盛大な交流会となりました。

主催したのは元ハバロフスク日本センター所長の前田奉司さん。日本センターで若手ビジネスマンの育成、ロシアと日本およびアジア諸国とのビジネス交流にあたった経験を生かして、退任後も毎年 2～3 回、ロシアからビジネス研修グループを日本に招へいし、交流を続けておられます。

日露ビジネス交流会の詳細は、18 頁の樫本真奈美さんのレポートをご参照ください。

モスクワ芸術工科大学訪日団

東京・板橋で「日露美術展」開催

3 月 24 日～28 日、東京板橋区の成増アートギャラリーにて「日露美術展」が開催されました。

モスクワ芸術工科大学の学生・卒業生とその家族ら 33 名が来日し、それぞれの小作品を展示、それに彫刻家で書道家の指田竹房さんが自身の書を添えました。引率したのは同大学のシャフィコワ・ラウシャニア教授で、一昨年 10 月に続いてこれが 2 回目の来日です。

一行は 25 日に新宿文化学園大学を訪問し大学交流の可能性を探るとともに、その後は青梅市の御岳山や鎌倉、京都にも足を延ばしました。生憎、今年は桜の開花が平年並みの 3 月末～4 月初になったため、サクラをたっぷりと見ることはできませんでしたが、春の日本観光を楽しんで、3 月 29 日に帰国しました。

「日露美術展」の企画は、このあともまだ続くようです。次回の来日が楽しみです。

JICロシア語講座　交流会を開催

「やっぱり対面で話すといいですね」

小原 浩子（JIC 大阪）

JIC のロシア語講座は 1990 年に東京で始まり、92 年から大阪でも開始、以来 30 年以上続いています。その間、担当者も替わり、現在は大阪在住の私が事務局を務めています。私が担当になってからすでに 10 年以上になりますが、毎年いろいろな動機でロシア語の勉強を始める受講生の皆さんをお迎えしています。

このロシア語講座をきっかけに、ロシア旅行に行ったり、ロシアへ留学したりした方が多数いらっしゃいます。今年も入門から初級、中級、上級まで 8 講座の新規受講生（4 月開講）を募集中です。

コロナが始まった 2020 年から、ロシア語講座は Zoom を使ったオンラインとなり、受講生と先生はパソコンの画面越しでしか会えなくなりました。東京でも大阪でも対面で授業を行っていた時は、終了後の帰り道に雑談したり、たまに受講生同士で一緒に食事したりする交流もあったのですが、オンラインでは雑談もなかなかしづらくなりました。

コロナが感染症法の第五類に移行し、普通の病気になってから 1 年。先生と受講生の皆さんが対面で話ができる機会を作ってはどうかと思い、この 3 月に JIC ロシア語講座交流会を開催しました。オンラインの良いところは、どこに住んでいるかに関わらず、パソコンとネット環境さえあれば講座が受けられることであり、以前はタイのバンコクから受講していた人もいましたし、現在の受講生の皆さんも北海道から長崎まで幅広い地域にお住まいです。「交流会をやりましょう！」となっても遠方からではとても無理、実際に参加できる人は限られた方にならざるをえません。受講生の皆さんが全員集まれないのは少し気になりますが、それでも対面での交流は貴重であり、まずは一度、関西で試しにやってみることにしました。

3 月 3 日（日）、京都のロシア料理カフェ・ヨージクで開いた交流会（食事会）には、京都に住むナターリア先生と関西在住 7 名の受講生の皆さんに参加していただきました。コロナ前から参加しているベテラン（？）受講生からつい最近ロシア語を始めたばかりの初級講座生まで、参加者のロシア語学習歴は様々、職業や年齢もバラバラですが、予めロシア語での自己紹介挨拶を考えてきてくださいとお願いしておきました。上級の方は難しい単語を使って、初級の方はメモを見ながら、それぞれロシア語で自己紹介を行い、クラスが違っていて普段顔なじみでない人たちも、ナターリア先生からの積極的な声掛けもあり、すぐに打ち解けてよい雰囲気になりました。

今回の会場＝カフェ・ヨージク店主の武井さんは、ハバロフスクのロシア人シェフからロシア料理を教えてもらったとのこと。ロシア料理には欠かせない生のディルやソバの実を使った本格的なロシア料理を出していただきました。おかげでナターリア先生も大満足でした。

今や英語でもロシア語でもオンラインのビデオ通話で学べる時代です。海外のロシア人とつないでの格安の個人レッスンもあります。そのような中でも、グループでロシア語を勉強する意義は何なのかと考えたとき、ロシアに様々な関心を持っている同好の人と知り合うことができ、ロシアやロシア語についてためらいなく話せる仲間ができることではないかと思います。「ロシア仲間」の広くゆるやかなつながりの場を作ることが JIC の役目でもあるのかなと、この交流会をやってみて改めて思いました。

次回は関東方面でもロシア語講座交流会をできればと考えています。受講生の皆さん、楽しみにしていてください。

カフェ・ヨージク；http://www.panographer.net/yojik/
JIC ロシア語講座 2024 年開催要項；
https://www.jic-web.co.jp/cgi-bin/blog/?c=detail&pk=3
申込みは → https://www.jic-web.co.jp/lesson.html

2024 年 JIC ロシア語オンライン講座

クラス	曜日／時間	開始日
入門	火曜 19:30－21:00	4 月 16 日
初級①	金曜 19:30－21:00	4 月 19 日
初級②	水曜 19:00－20:30	4 月 17 日
中級①	火曜 19:00－20:30	4 月 16 日
中級②（文法・会話）	木曜 19:00－20:30	4 月 18 日
中級③（講読・会話）	水曜 19:30－21:00	4 月 17 日
中上級（講読）	木曜 19:30－21:00	4 月 18 日
中上級（会話）	土曜 10:00－11:30	4 月 20 日

途中入会も可能です。お気軽にお問合わせください。

シベリア出兵によるロシア人犠牲者と第二次大戦後のシベリア抑留者の慰霊と墓参の旅に、この冬 1 人で出かけた人がいます。山梨県で建築業を営む齊藤寛さんです。曹洞宗の僧籍を持つ齊藤さんは岐阜県・勝善寺の横山周導さんが長年イワノフカ村への慰霊と墓参の旅を続けてきたことを知り、今年 3 月 22 日のイワノフカ村慰霊祭に単身参加されました。

以下は、齊藤さんから寄稿していただいた訪問記です。（編集部）

イワノフカ村慰霊碑の前で（左 2 人目が齊藤さん）

初めてのロシア旅行　イワノフカ村訪問

「戦争犠牲者の慰霊と墓参の旅」

齊藤　寛（株式会社大真・代表取締役）

私がアムール州イワノフカ村の慰霊祭に参列したいと思ったのは昨年の 9 月頃でした。岐阜県大垣市法永寺での集まりで「シベリヤ墓参と交流の旅」という小冊子を目にしたことがきっかけでした。それは、法永寺から遠くない揖斐川町に勝善寺というお寺があり、その住職である横山周導氏が代表をつとめた NPO が毎年おこなってきた慰霊の旅の報告書でした。私はこの中に書かれていたイワノフカ事件を通じた日本側とロシア側との交流のありかたに深い感銘を受けました。それは昨今の暗い世情の中で小さな明かりを見つけたような感覚でした。その後しばらくしてから横山氏と直接お話しをする機会を得、冊子の内容に関する私のいくつかの質問に明確な回答をいただきました。99 歳の高齢とは思えない力強いはっきりとしたお声でした。

横山氏は冊子の中で「シベリヤ出兵の際の日本軍兵士の残虐行為に対するロシア人の反感を知り、日本人として恥じると同時に、将来日本とロシアが仲良くするためには、どうしてもこの謝罪と慰霊の旅を続けなければならないと思いました」と書かれております。私はこの一文に深く賛同し、横山氏ら関係者の高齢化やコロナの影響でこの数年は交流が行われていない状況をもったいないと思いました。特別なことはしなくとも、日本側の思いを抱いてロシアの皆さんの前に立つことは重要ではないかと思いました。焦点を 2024 年 3 月 22 日に行われるイワノフカ村慰霊祭への参列という一点にしぼり、準備にとりかかりました。

ロシアへの旅行はビザの取得からして大変そうだったので、一括して旅行会社に頼むことにしました。ネットを検索する中で出会ったのが JIC さんで、要望を伝えて見積もりをお願いしました。担当してくださったのがたまたま？大阪スタッフの小原さんで、その時私は気がつかなかったのですが、前述の小冊子の主要な部分の記事を書いたご本人で、横山氏の旅行を長年手配した方でした。その経験を活かして今回いろいろと適切な配慮をしてくださり、旅行全体がスムーズに進み、現地に行ったときに大変助けられました。ロシアへの直行便がないのでどこで乗り継ぐのか、予算と時間調整も含めていろいろと検討していただきました。私自身も細かい準備をしたり日露関係の本を読んだりして、またたくまに 3 月に入り出発を迎えました。

＜イワノフカ村 訪問日程＞

3 月 18 日　成田でハルビン行きにチェックイン。ロシアへ乗り継ぐ乗客は書類を書くように指示され、カウンターで記入する。チェックインを済ませて搭乗し、ハルビン空港着。トランジットビザで入国しハルビン市内を観光。夕方国際線ターミナルに戻りハバロフスクに向けてあらためて出発。

3 月 19 日　深夜 1 時ハバロフスク到着。入国審査で別室でのインタビューとなる。私を含め数名がインタビューと書類作成をしたようだ。入国審査が終わり荷物を取ってロビーへ出て出迎えのドライバーとホテルに向う。私にとってのはじめてのロシアは凍てついたハバロフスクの夜の街だった。ホテルで仮眠して朝食をとり、荷物を預かってもらってチェックアウト。

地図を見ながらアムール川沿いを散策する。最初はそれ程寒くないように感じたが、時間がたつにつれ厳しい寒さであることがわかってきた。公園を歩いたり教会や博物館を見学したりする。地図を頼りに繁華街や市場などを歩く。市場の片隅でピロシキとお茶で簡単なお昼を済ませる。

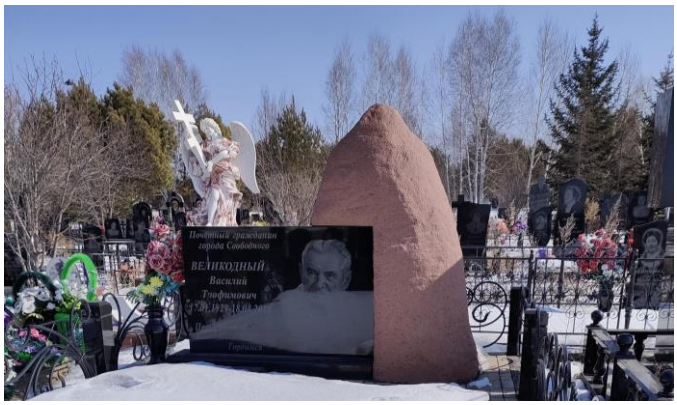
夕方、ホテルから荷物を持って駅に移動しシベリヤ鉄道に乗車する。コンパートメントで同室になったのはブラゴベシェンスク在住の 60 代半ばの男性で、横山周導さんの小冊子を見せると「この人のことはテレビで見たことがある」と喜

んでいた。

3 月 20 日　朝、ブラゴベシェンスク着。ハバロフスクを少し離れたあたりから e-SIM が使えなくなったので、ホテルに移動するためにタクシーが呼べないのは誤算。JIC の資料に書いてあったホテルまでの案内に従い駅前に来た 30 番バスに乗り移動、ホテル・ドゥルージバにチェックイン。

午後からアムール川沿いを散策する。スーパーに並ぶ食品は高品質で豊富で、車は日本よりも大型で高級なタイプが主流のようだった。街中では戦時下の影はまったく感ぜず、資源大国の余裕と底力を感じた。

3 月 21 日　タクシーで郊外の通称「17km」と呼ばれている墓苑にワシリー氏のお墓参りに行く。墓苑には若い軍人の遺影を刻んだ新しい墓がかなりの数あり、墓苑の正面の一画を占めていた。何とも言いようのない悄然とした気持になる。事務所で場所を教えてもらってワシリー氏のお墓にたどりつく。氏は日本人墓参者のために尽力してくださったとのことで、横山氏も墓参の度にお参りしたようである。



ワシリー氏のお墓。周囲には真新しい墓石も

市内に戻って翌日の慰霊祭のために花束を買う。夕方、露日協会の職員から電話があり、アムール支部のマリーナさんも式典に同行したいと言っているのだが良いだろうかと問い合わせがきたので了解する。

3 月 22 日　朝 7 時 30 分にロビーに下りる。すでに通訳のロマンさん、露日協会アムール支部長のマリーナさん、ドライバーのサーシャさんが待っていた。挨拶をしてから車でイワノフカ村に移動する。快晴。ゼーヤ河に架かる巨大な橋を含めて高速道路が整備されて予定よりも早い時間に到着。

役場を訪ねてワレンチナ・オレシェフスカヤ村長をはじめ 3 人の地区代表者の方と合流し、お茶を飲みながら打ち合わせをする。横山氏に関する話がしきりに出て、ロシア側にとっても氏の存在は特別なことと感ぜられる。

時間になり露日共同追悼碑に移動。林の中の碑を中心とした広場に村民が続々と集まり式典開始。ロシア側は地区代表者 3 名が、こちらは私、マリーナさん、通訳さん 3 名が碑を背にして並び村民の皆様と向き合う。幼稚園の子ども達が真正面に並んでいた。オレシェフスカヤさんの挨拶の後、ドゥーニン作「村の悲劇」の一部朗読、国歌、参加者全員で献花、地区代表の挨拶、国歌、解散という流れだった。

図書館で説明を受ける。右から 2 人目が露日協会マリーナさん

その後、2 名のご婦人の案内で村の公園、教会、博物館、図書館を見学する。博物館ではサモワールでお茶をいれてもらい、お菓子を食べながら談笑。図書館は政府の補助金を獲得して新築されており、規模は小さいながら設備が整っていた。製本の機材があり、館長さん自ら子供向けの絵本と本を執筆、印刷、製本したとのことで、お土産に 2 冊をサイン入りで頂戴する。規模の割にスタッフの姿が目立ち、図書館事業に力を注いでいることが伝わってきた。

ブラゴベシェンスクへ戻り食事。通訳のロマンさんから提案があり、翌日午後 3 時から日本語学校の生徒さんと交流会を開くことに決定。その後、ホテルに送ってもらい解散。

3 月 23 日　午前中は荷造りやロシア語の練習をする。ホテルチェックアウト後、午後 1 時にマリーナさん、日本語教師のエカチェリーナさん、ドライバーのサーシャさんが迎えに来てくれる。

市内の日本人墓地にお参りし、読経とお米等を供養する。中国風の公園や教会を案内してもらい散策。この日はロシアへ来てはじめての曇りで雪が舞ったが、こんな天気も好ましかった。

午後 3 時に図書館の会議室で日本語学校の生徒達と合流する。30 人くらい集まったようで小中学生が半分という感じ。ブラゴベシェンスクに日本人が来ることは稀らしく、日本人を見るのはみんな初めてらしい。しかし、この街は中国が近いしロシア自体が多民族国家なので私の存在は何の違和感もなかったと思う。ちなみに生徒達の日本語の発音は驚くほどにうまかった。その一方で漢字は難しいと異口同音にぼやいていた‥‥。「漢字が難しいのは日本人も同じです、辞書は手離せません」と答えた。時間いっぱいまで質疑応答をしたが、皆さんの質問が素朴なのが嬉しかった。最後に皆で写真を撮って解散。

早めの晩ご飯を済ませて、駅へ送ってもらってハバロフスクへ移動。

日本語教室の生徒たちとの交流会

3 月 24 日　夜行列車のコンパートメントはビジネスマンと老齢の夫婦との４人だった。ご主人は物静かなしゃべらない方だったが、ご婦人はテキパキした世話好きで、いろいろ面倒を見てくれる。ロシアも日本も女性は無敵である。

午前中にハバロフスクへ到着、快晴だが強風。タクシーでインツーリストへ移動。荷物を預けて市内観光をする。午後はタクシーで平和公園を慰霊訪問。

3 月 25 日　美術館が月曜で閉館日だと判明しがっかりする。午前中は教会やアムール河沿いを散策。川面を覆っていた氷が融けて一部流れが見えていた。鳥の姿や声も増えていた。市場で赤いカーネーションの花束と白い菊の花束を買う。

ホテルをチェックアウトしタクシーで空港近くの日本人墓地を訪問。読経しお米等を供養する。1 番のトロリーバスで空港に移動しチェックイン。出国手続きを終えて搭乗、ハルビンへ移動。バス、タクシーを乗り継いでホテルへ。

3 月 26 日　昨夜ホテルまで運んでもらったタクシー運転手の許（シー）さんにお願いして、朝 7 時 30 分にホテルに迎えに来てもらう。旧日本軍 731 部隊博物館（正式名称；侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館）見学。その後、山梨県旧豊村開拓団入植地、ハルビン郊外阿城県四道河（スードーホー）村を慰霊訪問。タクシーで片道約 2 時間 30 分。

3 月 27 日　ハルビンより成田に帰国。

＊　　＊　　＊

最期に。イワノフカ事件を見つめることは、とても大切なことだと思います。この事件の内容や歴史そのものも、ゲオルギー元村長や横山氏をはじめとした日露両国の交流の姿も、とても大切なことを示唆していると思います。私は日本人としてイワノフカ事件を反省し懺悔し、忘れない。そのうえでロシアの皆様と向き合っていきたいと思います。

「太陽の恵みと、水と空気を共有するお互いは同胞である」

ゲオルギー元村長のこの言葉こそ、私たちが最優先するべきものと信じます。

募集開始！

第 4 回ロシア文学読書感想文コンクール

「私のトルストイ」

NPO 法人ヘラルドの会の呼びかけで始まった「ロシア文学読書感想文コンクール」が、今年も開催されます。

開催要項は以下の通りです。

【中学生の部】字数 2000 字以内
トルストイの「幼年時代」「トルストイの民話」「戦争と平和」のうちから１つ選択。

【高校･大学生の部】字数 3000 字以内
プーシキン、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、トルストイ、ドストエフスキー、チェーホフの作品から１つ選択。

【応募期間】2024 年 8 月 24 日～9 月 23 日

【応募方法】原稿は word 横書き、メールで送付。件名は「第 4 回コンクール」。送付先；our.tolstoy+2024@gmail.com

【入賞発表】2024 年 11 月末／賞状と副賞（図書カード）

【主催】スラヴァ書房　**【後援】**NPO 法人ヘラルドの会

日ロ異業種交流会開催／4月5日、東京・築地

ビジネス文化交流で広がる民間外交の輪

樫本 真奈美（同志社大学ロシア語講師）

4 月 5 日、日ロ異業種交流会が築地「すしざんまい」奥の院にて盛大に行われた。

主催者は住友商事を退社後、ハバロフスク日本センター所長を務め、現在は株式会社 BUSINESS COORDINATION JAPAN 代表の前田奉司氏である。駐在時代に外務省、総領事館と協力し「ハバロフスク日本センター付属ビジネスマンクラブ」を設立、ビジネス研修や日本語教育の他、当時の大統領経営者養成プログラムの一環として毎年、ロシア全土から選ばれた優秀なビジネスパーソンを日本、台湾、韓国等に派遣してビジネスの発掘に努めてきた。

来日したのは 19 名のロシア人。住宅建設、乳製品製造、機械製造、穀物生産業、日用品製造、IT 関連企業など業種は様々で、その多くが経営者である。

訪日団のリーダーはハバロフスク出身のメルクーリー社マクシム・シュヴェツ社長で、前田氏と 20 年来の親交がある。シュヴェツ氏は、経済・文化活動を通じた日本とロシアの関係活性化を目指して、上記ビジネスマンクラブの設立に積極的に取り組んだ人物だ。日本との取引を望むロシア人経営者を中心に希望者を募り、産業視察と観光を組み合わせたツアーを組み来日のサポートをしている。訪日スケジュールは実に充実している。産業視察はロシアで最も人気のあるアサヒビールの工場をはじめ、パナソニックセンター、東京ビッグサイト、ヘーベルハウス展示場、江戸切子専門店、盆栽美術館、製菓工場などをめぐった。

もちろん、日本文化を楽しむことも忘れない。東京は忠犬ハチ公と渋谷スクランブル交差点、浅草、お台場を観光、富士箱根で遊覧船に乗り、京都では竜安寺石庭でしばしの瞑想、鎌倉は大仏と海岸でのピクニックと、盛りだくさんの内容だ。何より今回は桜が咲く時期に合わせて日程を組んだのが功を奏し、様々な場所で満開の桜を愛でることができたため、一同大満足の様子だった。

前田氏を「父のような存在」と語るシュヴェツ氏。「これまで前田さんから、日本人の考え方やビジネスの作法など、たくさんのことを教えてもらった。それはロシア人にとってもとても大切だ。多くのロシア人が日本企業や事業主との取引を望んでいる。橋渡しをすることで恩返しがしたい」と語ってくれた。

日ロ異業種交流会は、株式会社喜代村「すしざんまい」の社長、木村清氏の挨拶で幕を開け、お馴染みの両手を広げる「すしざんまいポーズ」で各々が木村社長と写真を撮り大きく盛り上がった。ロシアとも海産物の取引がある木村社長は、「今日はロシアから来てくださった皆さんのために、格別に美味しいマグロを用意しました。どうぞお楽しみください」と、笑顔でもてなした。「マグロ外交で世界を平和に！」をモットーに掲げる木村社長は、双方の国が互いに潤うような経済活動の重要性を説き、それが平和につながるとして世界各国をとびまわっている。

「すしざんまい」木村清社長（中央）の挨拶で幕開け

日本側は総勢 18 名の参加者が集まった。日本ウラジオストク協会と湘南ロシア倶楽部の協力で、元大手商社勤務のビジネスコンサルタント、各種貿易業務に携わる方々、新聞記者、IT 専門家、日本語教師、ロシア語を学ぶ学生まで、年齢、職種ともに多種多様な顔ぶれが集まった。

この異業種交流会の良いところは、これまでロシアと取引がなくても、ロシア語がわからずとも気軽に参加できることだ。取引の要望を伝えれば、これまで対ロビジネスの最前線で活躍してきた猛者たちが自らの人脈を生かしてアドバイスをしたり、ロシア側との橋渡しをしてくれる。もちろんロシ

ア人参加者からも熱心な助言がその場で飛び交う。交流会の翌日からすぐに条件交渉が始まった案件もあり、活発な様子がうかがえる。

前田さんから研修修了書を授与される参加者

参加者の仲下尚治氏（貿易会社経営）は、経済制裁の影響でロシアからの送金やモスクワに商品を輸送するロジスティクスに難点があったものの、昨年末から状況が大きく変わったと言及した。「日系のロシア銀行SBI BANKからの円送金が容易に行えるようになったこと、ウズベキスタン航空が毎週金曜日、成田発、タシケント経由モスクワまでのフライトを運行するようになったためです。日本政府の経済制裁は今後も続くことが予想され、日本とロシア間のビジネス環境は厳しいですが、私はそんな環境だからこそ、ビジネスを途絶えさせてはならないと思っています」と力強く語った。

ロシア側参加者のアナスタシアさんは「ロシア人と日本人にはたくさんの共通点があると思います。私たちは経済活動を通して、お互いのことをもっとよく知り、よい協力関係が築けると思っています」と話した。

主催者の前田氏は「今回の訪日ビジネスマン達は特に、何とか新しいビジネス発掘のきっかけをつかみたいという意欲に満ちた人が多い。すでに日本側と商談の手がかりをつかんだ人もいる。今回も様々な分野で交流が生まれることを祈っている」と締めくくった。

まさに民間外交の最たるものである。今後もこの輪が広がり続けることを願ってやまない。

ロシア文化フェスティバル2024
今年前半のプログラム

オープニングコンサート

日時；4 月 22 日(月) 18:00 開場　18:30 開演
会場；紀尾井ホール（東京都千代田区）
入場料；5000 円（全席指定）
出演；レフ・ジュラルスキー（クラリネット）
　　アンドレイ・タラヌハ（パーカッション）
　　エリザベータ・クリュチェリョーバ（ピアノ）
　　中村　初恵（ソプラノ）
　　松田　華音（ピアノ）
　　前橋　汀子（ヴァイオリン）

ロシアの新星コンサート 2024

オープニングコンサートで来日する新進気鋭 3 名のソリストによるコンサート
4 月 23 日(火)　横浜／神奈川県民ホール小ホール
4 月 24 日(水)　千葉／市川市文化会館小ホール
4 月 25 日(木)　埼玉／さいたま市文化センター小ホール
いずれの会場も 18:00 開場、18:30 開演
入場料；3000 円（全席指定）

モスクワ芸術座日本公演 2024

文豪チェーホフの隠れた傑作『決闘』を上演
日程；5 月 28 日(火)　17:30 開場、18:00 開演
　　5 月 29 日(水)　17:30 開場、18:00 開演
　　5 月 30 日(木)　17:30 開場、18:00 開演
　　5 月 31 日(金)　12:30 開場、13:00 開演
会場；東京・かめありリリオホール（JR 亀有駅南口）
入場料；8000 円（全席指定）

ソ連映画祭

プーシキン生誕 225 周年記念映画祭

日時；6 月 13 日(木)　12:30 開場、13:00 開演
会場；東京・浜離宮朝日ホール（小）
上映作品；「サルタン王物語」(1966 年／86 分)
　　「ルスランとリュドミラ」(1972 年／140 分)
入場料；　1000 円（1 日券／全席自由席）

ムソルグスキー生誕 185 周年記念オペラ映画祭

日時；6 月 21 日(木)　12:30 開場、13:00 開演
会場；東京・浜離宮朝日ホール（小）

上映作品；「ボリス・ゴドゥノフ」（1955 年／110 分）
「ホヴァンシチナ」（1959 年／140 分）
入場料； 1000 円（1 日券／全席自由席）

ムソルグスキー生誕 185 周年記念コンサート

日時；7 月 1 日(月)　18:00 開場　18:30 開演
会場；銀座・王子ホール（東京都中央区）
出演；ミハイル・カンディンスキー（ピアノ）
ヴィタリー・ユシュマノフ（バリトン）
藤間　蘭黄（日本舞踊）
山本　隆之（バレエダンサー）
木曽　真奈美（ピアノ）

問合先；ロシアン・アーツ
TEL; 03-5919-1051（平日 11:00 - 17:00）
E-mail;　russian-arts@e-mail.jp

◇◆編集後記◆◇

▼本号は、下斗米伸夫先生の講演録をメインに、日ロ交流情報を集めました。▼3 年目に入ったウクライナ戦争は、昨年 6 月から始まった反転攻勢が失敗に終わり、膠着状態に陥っています。欧米諸国の「支援疲れ」やイスラエル軍のガザ地区での残虐行為などとも相まって、国際政治の構図は大きく変わろうとしています。下斗米先生によると、ウクライナでもアメリカでもいくつかの変化が現れており、今後、ウクライナ戦争の停戦和平に向けた圧力が次第に強まっていくものと期待されます。1 日も早い停戦の実現を願うばかりです。▼コロナとウクライナ戦争のダメージは深刻ですが、JIC は辛抱強いスタッフと多くの協力者の皆さんに支えられて、再建への道を歩んでいます。困難な時こそ明るく元気に、日ロの人的交流・文化交流を維持し将来拡大するために、頑張り続ける決意です。(F)

＊＊JICのロシア語留学・研修＊＊

35 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 35 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 4,500 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学中の皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学９月生・募集中

オンライン相談 受付中！

期間：2024年9月1日より10ヶ月
締切: 2024年6月14日

モスクワ国立大学　984,000 円（授業料 10 ヶ月）
ｻﾝｸﾄ･ﾍﾟﾃﾙﾌﾞﾙｸﾞ国立大学 1,039,000 円(授業料 10 ヶ月)
ゲルツェン教育大学　908,000 円（授業料 10 ヶ月）
ｳﾗｼﾞｵｽﾄｸ極東連邦大学 430,000 円(授業料 10 ヶ月)
ミンスク国立言語大学　422,000 円(授業料 10 ケ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！（中央アジア、バルト諸国など）

◆JIC ロシア留学デスク◆
電話またはメールでご連絡ください。
東京事務所　平日 9:30-16:30　03-3355-7294
※留学相談はオンラインで行っております（要 事前予約）